

竹内街道と河内鑄物師の里

西田 孝司(松原市文化財保護審議会)



▲「新池改修記念」碑
(平成13年) 立部4丁目



▲出土した鑄型片と炉壁片
(遺構・遺物とも松原市教育委員会提供)



▲発掘された鉄滓のつまつた土坑群(柏木住宅建設地)
右(北)が竹内街道、後方(西)に立部団地が見える。



▲「緑の一里塚」[竹内街道]モニュメント(立部5丁目)

立部遺跡から見つかった「工房」「緑の一里塚」記念碑の顕彰

日本最古の官道(国道)といわれる竹内街道が岡五丁目目の松原南コミュニティセンター前から東へ向かうと、立部に入ります。まもなく、右手に府営松原立部住宅の高層団地が林立しています。同地はもともと地蔵池で、立部や岡の畑に水を送っていました。江戸時代末期の天保十四年(一八四三)七月の『河州丹北郡立部村明細帳』には、「長六拾間、横五拾間」「立部村・松原村立合池二而御座候」と記されています。地蔵池は昭和四十二年(一九六七)、団地建設のために池敷面積一、三〇haが埋め立てられたのです。

さらに進むと、右手に市営柏木住宅があり、街道沿いのポケットパークに「竹内街道」「緑の一里塚」のモニュメントが建っています。平成二十五年(二〇一三)の建立ですが、『日本書紀』の推古天皇二十一年(六一三)に「難波より京に至る大道を置く」と記されていることから、これが竹内街道の初見と考えられ、敷設一四〇〇年を記念したものです。

松原市は、大阪府の「みどりの風を感じる大都市・大阪」の取り組みと連携し、「公財」国際花と緑の博覧会記念碑を建て、広場を整備したのです。

「緑の一里塚」碑は、その後も大阪市・堺市・羽曳野市・太子町にもつくられました。立部の碑は記念すべき府内第一号であり、本年四月、日本遺産に認定された「竹内街道」板のさきがけでもあるのです。

モニュメント前には「竹内街道と立部遺跡」の説明パネルが建てられています。同文は私が執筆したのですが、同地は明治中期まで、丹北郡立部村で、街道南側の碑の建つ地は小字柏木とよび、道をはさんで海道浦の小字名も残っています。天保十四年「立部村明細帳」には、竹内街道を「初瀬海道」と記し、大和の長谷寺(桜井市)方面に向かう道として認識しています。

竹内街道が通るこのあたりは、立部遺跡とよばれ、旧石器から近世に至る複合遺跡です。とくに、平成七年(一九九五)、記念碑が建つ柏木住宅が建て替えられる際、平安時代後期と鎌倉時代に存在していた河内鑄物師の工房に關わると思われる多数の土坑、掘立柱建物跡、井戸跡などが検出されました。当時、立部や岡の丹北郡から南の現堺市美原区大保・真福寺の丹南郡にかけて、多くの鑄物師がおり、鍋、釜や梵鐘づくりに励んでいました。市内では府営岡住宅(岡二丁目)でも、平安時代以降の鑄造遺構が見つっています(「歴史ウォーク」32)。

柏木から検出された土坑は、鑄型や炉を構築するための粘土を採掘した跡と考えられます。その中からは、黒色土器碗や瓦器碗のほか、鑄物の鑄造にともない排出されたと思われる多数の鉄滓や鑄型片、炉壁片などが見つかりました。遺構は竹内街道の北側の海道浦にまで広がっていると想定され、鑄物師の大規模な工房が立部に存在することがわかったのです。

こうしたことから、中世の古道は、今より南の大阪中央環状線あたりを走っていたのではないかという見方もあります。現道は、寛政九年(一七九七)の二基の道標が岡四・五丁目目の現竹内街道上に遺存していることから(「歴史ウォーク」139)、江戸時代に今のように整備されていたのでしよう。

「緑の一里塚」をなおも東に進むと、中央環状線の美原ロータリーの北側を横切ります。歩道を渡った東側に「新池改修記念碑(平成十三年)」が建っています。ここは中央環状線の開通によって埋め立てられた新池の跡です。天保十四年「立部村明細帳」には、新池が「長七拾貳間横五拾九間」「立部村之地へ懸り申候」とあり、立部の畑に水を送っていました。昭和四十三年に、池敷面積〇、八五haの大部分が埋め立てられたのです。

碑前の街道沿いには、松原市庶プラスチック処理施設も建っています。